

オフィス・ワークプレイスの知的生産性研究部会

知識創造とワークプレイス

梓設計のオフィスにおける SOF評価と今後の展望

ポストコロナのワークプレイスの役割

昨今、多様化する働き方によりワークプレイスの役割と機能が変わりつつある。必ずしも毎日オフィスで働くことが必須ではなくなる一方、健康や知識創造の面でワークプレイスが果たす役割が期待されている。当部会では知的生産性を支えるワークプレイスモデル SOF*を活用し調査研究を行っているが、その中から第15回日本ファシリティマネジメント大賞優秀ファシリティマネジメント賞を受賞した梓設計「HANEDA SKY CAMPUS」について岡田氏からプレゼンを行った。同社は会社規模拡大に伴う面積不足、分散していたオフィスの統合のため、羽田空港に近い元物流倉庫の5,300m²のワンプレートオフィスに本社を移転した。人員増によるコミュニケーションの課題を抱えており、新しいワークプレイスでは大きなワンルームでお互いの顔が見えて、オープンで自由な空気が流れ、創造性が育まれる環境づくりを行った。また、社員がいつでもどこでもパフォーマンス高く働けるように、フリーアドレスを採用するとともに、立地を考慮し、サテライトオフィスやコワーキングスペースを組み合わせたハブ&スポーク型のワークプレイスとした。移転半年余りで、新型コロナウイルスによる緊急事態宣言が出された時もスムーズに在宅勤務に移行することができた。

SOFから見えてきた強みと改善点

センサによる環境モニタリングにより快適性について一定の評価が得られ、知的生産性についてはSOFモデルを使い検証を行った。SOFの50項目について重要度と達成度を6段階で評価するアンケートを実施、そ

部会長 齋藤 敦子

さいとう あつこ

コクヨ株式会社
 ワークスタイルイノベーション部
 主幹研究員



部会員 岡田 孝介

おかだ こうすけ

株式会社梓設計
 参与 ワークプレイスドメイン長



部会員 坪本 裕之

つばもと ひろゆき

東京都立大学
 都市環境学部 地理環境学科 助教

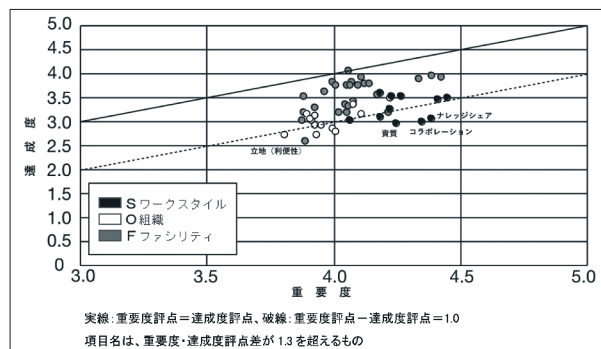


の結果を東京都立大学の坪本氏が解説した。平均値を散布図として示したものが下図であるが、F項目の達成度、特に立地を除く建物、執務環境についての評価が極めて高かった。ワークプレイス施策が社員にも認識、評価されていることが確認できた。一方、重要度評価において、O項目と一部のF項目の評点が相対的に低かった。達成度評価についてはS・O項目、とりわけ「価値創造」の評点が低かった。「価値創造」は今後の企業経営でより重視されており、今後はソフト面での支援や意見交換の場も必要である。部門や職層などによる違いもわかり、今後はソフト面での施策の検討にも役立てていく。最後に、これからのワークプレイスは知的生産性を支える場として、健康やウェルビーイングへの配慮だけではなく、学びや体験、ESGへの取り組みなど、従業員同士の共創や行動変容の機会を生み出す場としての機能が望まれると論じた。◀

*SOFモデル:『公式ガイド ファシリティマネジメント』FM推進連絡協議会編,日本経済新聞社, 2018年1月, p.214-p.216



写真 梓設計「HANEDA SKY CAMPUS」



図表 「HANEDA SKY CAMPUS」項目ごとの重要度・達成度評価: 評点比較

調査研究部会 ● オフィス・ワークプレイスの知的生産性研究部会